

(4) 【中学校】学習内容についての課題

平成28年度の中学校調査から浮かび上がった町全体の傾向から、「知識」と「活用」についての課題は次の通りである。

中学校の傾向

- ① 基礎的・基本的な学習事項については、年度ごとにばらつきがあり、知識の習得について継続的な取り組みが必要である。
- ② 何について考え、何を活用して課題解決に向かうか、そのつながりを意識した学習基盤を整えることが求められている。

(基礎的・基本的な知識に関する内容)

- a 設問ごとに全国と正答率を比較したとき、全国との開きが大きくなり、昨年度までの課題がより顕著となった。

(既習事項を活用し、表現する内容)

- b その事柄について、文章や式などから意味を考え、設問にあった形を選ぶ、もしくは表現することに課題がある。

○ 国語A

語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使う、文の成分の照応について理解するなどの特定の設問に課題がある。

平成26年度から漢字を書くことについて課題として挙げられており、今年度については読みの設問で3問中2問、書きの設問でも3問中2問において全国と5ポイント以上の開きがある。中学校については、学年配当の漢字がないことから、日常的に漢字を使っていくことが大事である。

また、昨年度同様に「語句を適切に使う」「文の成分を照応させる」「歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して読む」等、伝統的な言語文化と国語の特性に関する事項において課題が残っている。

○ 国語B

「自分の考えを書く」という設問では、必要な情報を明確にし、根拠を明らかにすることについて課題がある。

過去2年の傾向と同様、「本や文章などから必要な情報を読み取る」「文章の構成や表現の仕方について理解する」など、記述するための情報を取り出すこと、それをもとに自分の考えを持つことについて課題がある。このことについては正答率が低いこととともに、無回答率が高いことも根拠として挙げられる。「書くこと」につながる「読むこと」についての習熟も求められる。

○ 数学A

**一元一次方程式の解法、比例、一次関数について課題がある。
多角形や角など、図形の理解に課題がある。**

「数と式」の分野において、一元一次方程式を立式する設問や、一元一次方程式を解く設問、また、比例や一次関数などの基本的な内容に関する設問について、全国との正答率に開きがある。

「図形」の分野においても、多角形の外角の和、平行線や角の性質に関する設問において、基礎的・基本的な知識の理解に課題がある。図形については視覚的に捉えることができるので、具体的なイメージを持たせるとともに、図と学習事項のつながりについての指導が必要である。

○ 数学B

**必要な情報を適切に判断し、説明することに課題がある。
図形について説明することに課題がある。**

「数と式」や「関数」の分野において与えられた情報から解につながる根拠を探ることが難しいこと、また、それについて自分の考えを記述することに課題がある。

「図形」については筋道を立てて説明することに課題があり、全国と同様の傾向であるが、正答率が低いこととともに、無回答率が高いことも特徴としてあげられる。問題文や図から切り口を見つけることができず、それが意欲に反映されているのだが、日常においても「解こうとする」「少し努力して解く」経験を積むことが必要である。

(4)【中学校】学習についての改善点

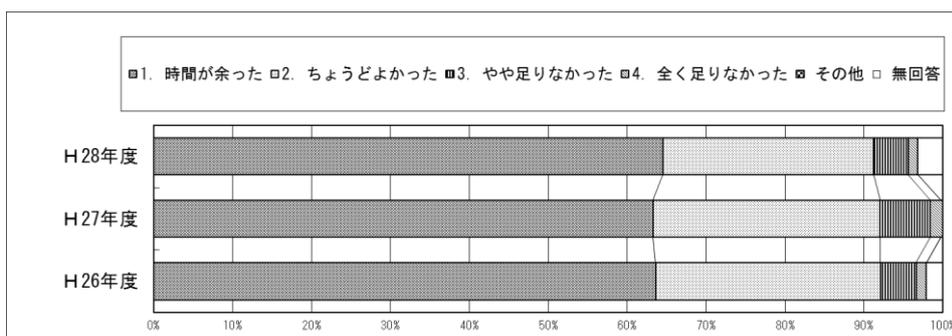
「知識」と「活用」については先述したとおりであるが、小学校同様、学習内容とともに学力の向上を図る上で考えなくてはならないのは、生徒の関心・意欲・態度である。この上に学力が積み上げられるので、無回答率や回答時間については学習への向き合い方について指標となる。

無回答率と「解答時間は十分だったか」の経年変化

無回答率 (%)

国語A	25年度	26年度	27年度	28年度
寒川町	3.6	4.0	2.8	4.1
全国との差	(1.2)	(0.9)	(0.2)	(2.1)
全国	2.4	3.1	2.6	2.0

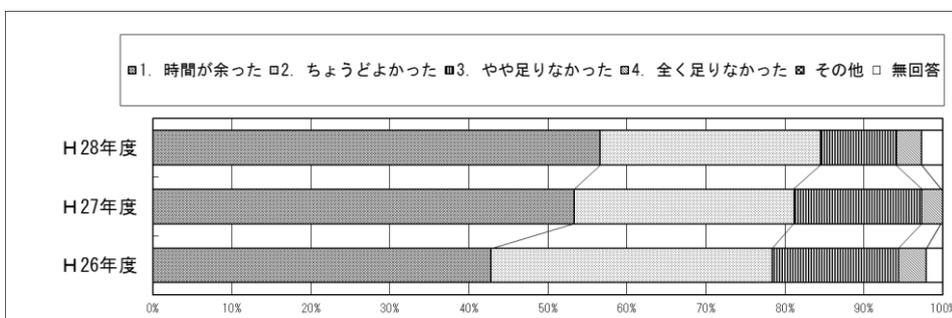
「解答時間は十分だったか」



無回答率 (%)

国語B	25年度	26年度	27年度	28年度
寒川町	4.8	4.5	2.5	8.1
全国との差	(2.0)	(1.0)	(0.3)	(3.7)
全国	2.8	3.5	2.2	4.4

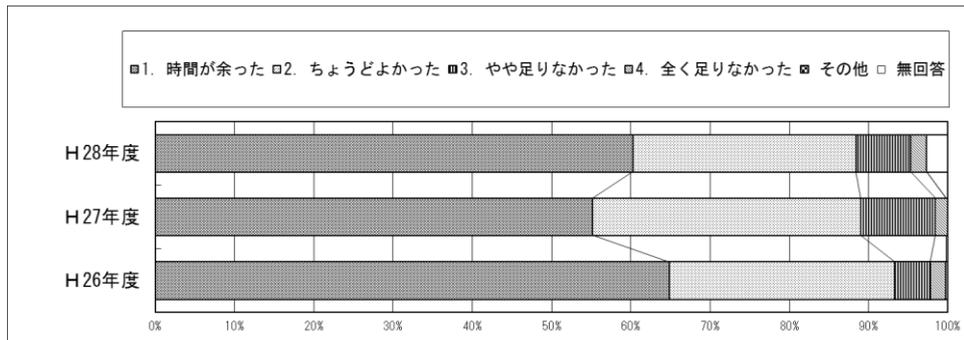
「解答時間は十分だったか」



無回答率 (%)

数学A	25年度	26年度	27年度	28年度
寒川町	6.0	5.2	3.8	9.4
全国との差	(0.7)	(0.9)	(0.1)	(3.1)
全国	5.3	4.3	3.7	6.3

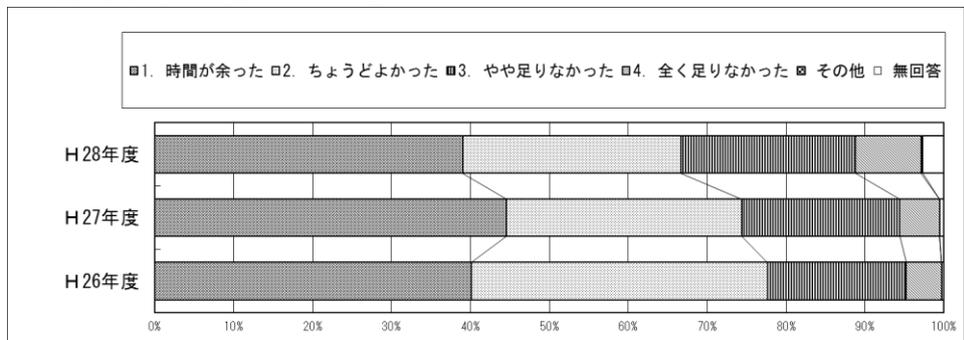
「解答時間は十分だったか」



無回答率 (%)

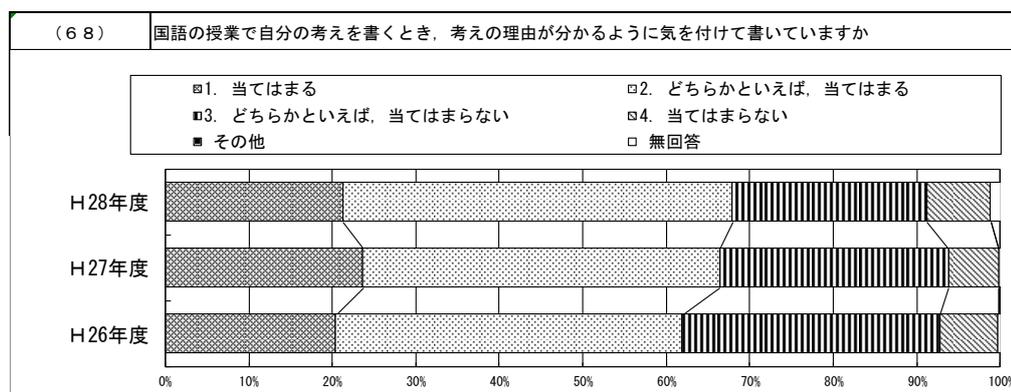
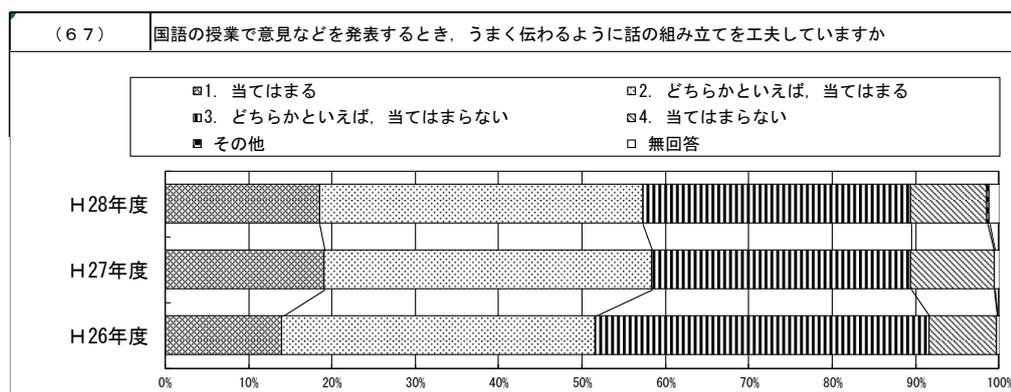
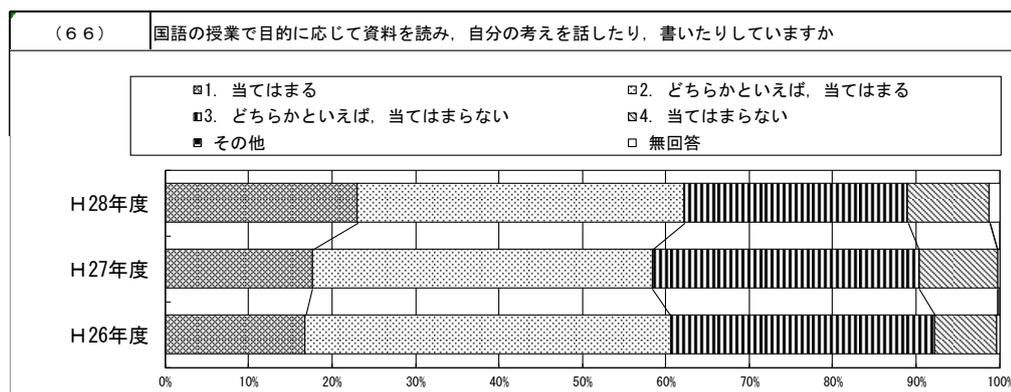
数学B	25年度	26年度	27年度	28年度
寒川町	20.9	13.7	14.0	22.2
全国との差	(4.2)	(2.8)	(+1.3)	(7.5)
全国	16.7	10.9	15.3	14.7

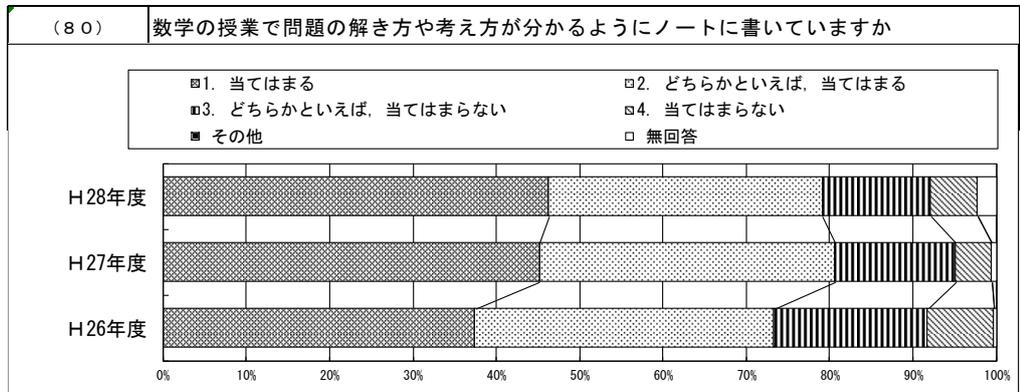
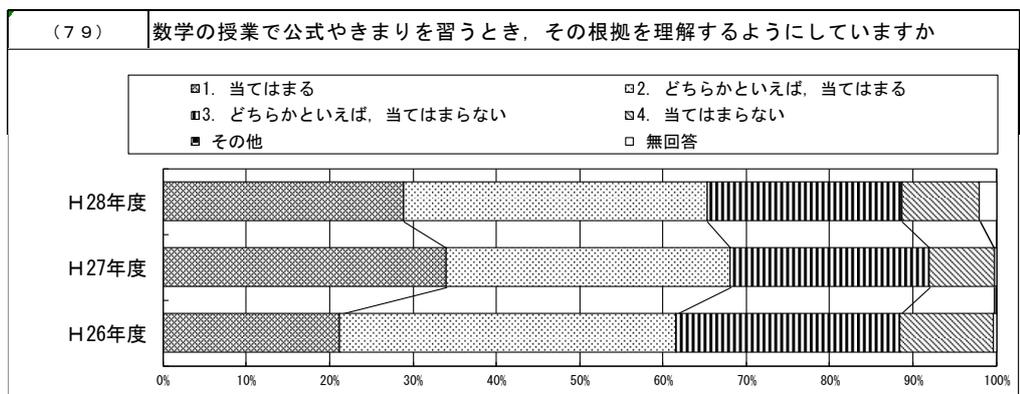
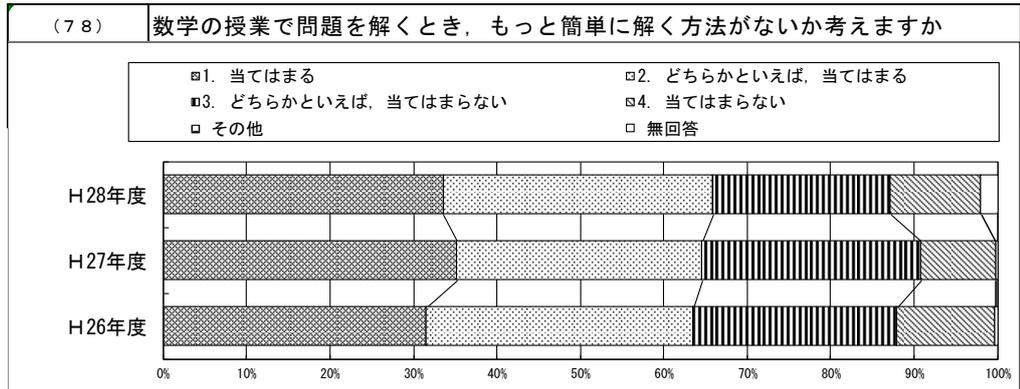
「解答時間は十分だったか」



無回答率と児童質問紙「解答時間は十分だったか」において、無回答率については「知識」に関する問題、「活用」に関する問題ともに昨年度より大きくポイントが上がっている。その反面、解答時間については「時間が余った」「ちょうどよかった」が経年変化としては大きな変化は見られず、特に「時間が余った」の解釈については生徒によって違いがある。中学校の傾向①にあるように基礎的・基本的な内容についてのばらつきが大きく表れ、中学校の傾向②についても、生徒自身が感じるほど習得した知識をもとに考え、活用できていない現状がある。生徒の意識と現状とのズレについては質問紙の項目経年変化から見取ることができる。

国語、数学とも「好きである」という質問について「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の割合が50%程度で、「授業の内容はよく分かる」という質問について「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の割合が70%程度である。学習についての取り組みについて、生徒自身が十分に成果を感じられていないことも多く、授業での取り組みと生徒の実感について開きが出ていると考えられる。





これらのことから、「話す」「書く」「考える」「説明する」という授業での取り組みが平成26年度から改善されていることが分かるが、昨年度からの伸びはあまり見られず、取り組みの中で課題が見えにくくなっていることが仮説として挙げられる。先述したように、授業での取り組みがどのように生徒の力になったのか、どの部分が実態に合っていなかったのか、授業内での改善についてより丁寧な見取りが必要である。

以上のことから、今後の改善の方向性については次の通りである。

中学校 改善の方向性

- ア 基礎的・基本的な学習事項については、習得・習熟させる上で困難な部分に焦点をあて、継続的に取り組む。
- イ 考える・活用する学習については、考えるもとになる事項、その使い方について、実践の中で実感できるようにする。